

英語品詞転換の定義と適用

木村 卓人

[キーワード：①品詞転換 ②形容詞的受動分詞 ③形容詞的現在分詞 ④修飾名詞]

1. はじめに

英語では多くの語に複数の文法機能が備わっている。例えばhammerという語は、John hit the nail with a hammer.のように名詞として使われることもあれば、John hammered the nail.のように動詞として使われることもある。これらの例では、名詞の「ハンマー」として使われていた語が、動詞としても使われるようになったのであるが、このように綴りを変えず、名詞から動詞のように文法機能が変わることを「品詞転換」と呼ぶ。品詞転換に関する先行研究はこれまで多く発表されてきたが、品詞転換の定義が先行研究ごとに異なっていたり、明確に示されてこなかったりしていた。例えば、品詞転換の過程を「ゼロ品詞転換」とする先行研究がある一方で、Category Underspecification Approach (CUA) という統語論的な説明方法をとるものや、Re-listingのようにメンタルレキシコンを想定した説明方法をとるものもあり、品詞転換の過程だけでも3つの説明がこれまで発表されてきた。そのため、本稿では品詞転換の定義を改めて見直し、明確な定義を示すと同時に、その定義を先行研究ではあまり触れられてこなかった、一見品詞転換のように思える表現に当てはめ、それらが実際に品詞転換であるかどうかを考察する。

第2節では、先行研究における品詞転換の3つの説明方法、すなわちゼロ品詞転換、CUA、Re-listingについて検証した後、本稿における品詞転換の定義を示す。第3節ではa broken vaseのbrokenのような形容詞的受動分詞や、an interesting bookのinterestingのような形容詞的現在分詞を、第4節ではan Ebola patientのEbolaのような修飾名詞を取り上げ、第2節で示した品詞転換の定義を基に、これらの表現がそれぞれ品詞転換と見なして良いかどうかを議論する。

2. 品詞転換の定義

2.1 先行研究

前節で品詞転換は綴りが品詞転換前（以下、ベース (base)）と後の語（以下、派生語 (derivative)）で同じであると書いたが、例えば固有名詞Google (n) は、動詞ではgoogle (v) とgが小文字で書かれることもあり、厳密に言えば形が同じではない。また、ベースと派生語で音が同じとはいえず、例えばfragmentは、アクセントが名詞ではfraに置かれるが、動詞ではmentに置かれる。形も音も変わってしまうものは、shelf (n) とshelve (v) などがあるが、以上の例を見てみると、ベースと派生語で形や音が同じだという定義は不十分であることがわかる。

また、その他の定義についても先行研究によって違いが見られる。例えば*Understanding Morphology* 第2版 (2010: 39-40) では、品詞転換を以下のように定義づけている。

- (1) 品詞転換は、一般的に派生的語形変化のためにのみ起こり、ほとんどの場合、語彙レベルは異なるが、関連する二つの語彙素に対して起こる。

このように品詞転換が語彙的に捉えられている。hammer (n) とhammer (v) を例にとれば、名詞と動詞という語のレベルは異なるが、どちらも「ハ

ンマー」に関連している語であり、このような語の間で品詞転換が起こると捉えている。

また*The Oxford Reference Guide to English Morphology* (2013:546) でも、(1)と同じく語彙的に品詞転換を定義している。

- (2) 二つの語彙素の引用形式の元々の形が同じであり、その二つの語彙素が別の品詞に属する・・・

語彙的に品詞転換を捉えることの特徴は、品詞転換のベースと派生語自体に品詞がある、ということである。一方、統語論的に品詞転換を捉えたものもある。*The Concise Oxford Dictionary of Linguistics* 第3版 (2014:82) では、品詞転換を「ある統語的役割として主に使われていた語が、他の役割を付与され、副次的に使用されるようになる、という過程」と捉えている。この本では他動詞と自動詞も品詞転換の対象にしている、例えば元々他動詞であった動詞が自動詞として使われるようになった場合、その動詞は他動詞から自動詞に品詞転換したと解釈されている。

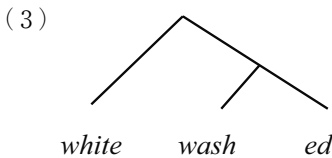
以上のように、先行研究によって品詞転換の定義が様々であるため、品詞転換の定義についてこれから述べていくが、本稿では主に品詞転換の3つの説明方法（ゼロ品詞転換、CUA、Re-listing）について詳しく述べる。この3つの説明方法の内どれが最も良いか、という結論に入る前に、まずは3つそれぞれについて詳しく見ていきたい。まず初めにゼロ品詞転換について観察し、その後CUA、Re-listingの順に観察する。

2.2 ゼロ品詞転換

ゼロ品詞転換とは、Marchand (1969) が主張しはじめたもので、品詞転換を接尾辞の一種として捉える説明方法である。形容詞であるlegalに接尾辞-izeを付けて動詞のlegalizeになるように、名詞のhammerに接尾辞と同等の役割を担う接尾辞(-φ)を付け、hammerという動詞ができるの

である。-izeがある語を形容詞から動詞にする役割を持っているように、-φは、hammerの場合、それを名詞から動詞にする役割を持っているのである。このように、ゼロ品詞転換の考え方では、-φと接尾辞は文法機能を変える役割を持つという点で同じであり、-φは接尾辞と同等であると解釈される。この説明は広く浸透していて、品詞転換をゼロ品詞転換の観点から説明している先行研究は多い。

しかし、ゼロ品詞転換にはいくつかの問題点が指摘されている。例えばStrauss (1982) では、Williams (1981) の「順序制限」(ordering restrictions) という英語の語形成における規則を挙げ、-φを用いた説明に問題があることを示している。順序制限の一つに「動詞の屈折は複合語の『内側』になければならない」(“Inflections must be ‘inside’ compounds.” (Strauss (ibid.: 695 (1) c.)) という規則があり、例えば品詞転換で名詞から動詞となった whitewash という語の過去形への屈折は、順序制限に則って解釈すると以下のような樹形図となる。



屈折語尾である -ed は、複合語である whitewash の内側に入るため、-ed がかかるのは whitewash の全体ではなく、その一部分、wash である。この樹形図を数式で表すと次のようになる。

(4) $\text{white} + [\text{wash (v)} + \text{-}\phi] = \text{whitewash (v)}$

このように -φ は接尾辞と異なり、文法機能の変化に影響を与えていないことがわかる。-φ が付くのは wash という動詞であり、ここには文法機能

の変化は起こっていない。つまり、品詞転換を接尾辞付着と同等のもの
と捉えるには、無理があることが分かる。

また、Plag (1999) は、英語の語形成において文法機能の変化を担うの
は接尾辞だけでなく接頭辞もあり、接頭辞と接尾辞の二つの ϕ を想定す
るのは妥当ではないと述べている。接頭辞で文法機能の変化を担うも
のとしては、例えばenlarge等のenがある。この場合、largeという形容
詞にen-という接頭辞が付き、enlargeという動詞ができていることから、
接頭辞も文法機能の変化を引き起こすことが分かる。

本稿ではさらにもう一点、ゼロ品詞転換の問題点を指摘したい。品詞
転換は、接辞よりも多くの種類の語句で起こるものであり、品詞転換を
接（尾）辞と同等のものとして捉えることはできない。以下に示すように、
例えばoopsのような間投詞、oh my Godのようなフレーズ、giveawayの
ような句動詞、state of the artのようなイディオム等も品詞転換をするが、
これらは接辞による文法機能の変化を持たない。

- (5) I pushed the bathroom door and spotted two hangers on a fancy brass
hook on the back of the door. ‘Oops,’ I said. ‘Oops what?’ Jannie asked.
‘Oh,’ she said when she saw what I was oopsing about.

(Rufa, H. Rufa, and Leila M. Willett (2014) *Maybelline Takes a Powder:
a Rod Axell-Janine Zimmer Caper*, Strategic Book Publishing Rights
Agency, Houston.)

- (6) I have no idea how Ella managed to contain herself on the way into
Manhattan. She sang New York, New York to the point that I actually
wanted to batter her to death. Then she kept oh my God-ing every time
she spotted a famous landmark.

(Smith, Lenny (2014) *Choices*, Lulu.com. <<https://www.lulu.com/>>)

- (7) Three vertical rice grains are a giveaway because poachers often work

in threes — a tracker, a shooter with a heavy-caliber rifle and a carrier with supplies and an ax to hack off rhino horn for eventual sale on an illegal Asian market.

(AP, (2016, February 24), “Drones take to South Africa skies to combat rhino poaching,” The Japan Times.

<<http://www.japantimes.co.jp/news/2016/02/24/world/science-health-world/drones-take-south-africa-skies-combat-rhinopoaching/#.WIvv9YVOI0Q>>

(8) Japan’s state-of-the-art maglev train set a world speed record Tuesday during a test run near Mount Fuji, clocking more than 600 kph.



(AFP-Jiji, (2015, April 15), “Maglev train clocks 603 kph, setting new world record,” The Japan Times.

<<http://www.japantimes.co.jp/news/2015/04/21/business/tech/maglev-train-clocks-603-kph-test-run-notching-new-world-record/#.WIVrbYVOI0Q>>

以上のことからゼロ品詞転換は、品詞転換の最も良い説明と考えることはできないと結論付けられる。

2.3 Category Underspecification Approach (CUA)

品詞転換の統語的説明方法であるCategory Underspecification Approach (CUA) は、品詞転換が起こる語自体に文法機能を想定せず、文に現れることによって初めて文法機能が付加されると説明している。この説明方法の代表的な先行研究はBorer (2003) であり、具体的には以下のように説明している。

- (9) a. [D <...>D [L-D dog, form]] L-D→NP

- b. [T <...>T [L-D dog, form]] L-D→VP


(9 a, b)においてDはdefinite (定冠詞)、Tはtense (時制)を表す。L-Dでは、dogやformに文法機能が付加されていないが、[]内の語が矢印のようにDやTに移動することによって初めて文法機能が付加される。(9 a)では、dog, formがDへ移動して、「定冠詞+ dog, form (n)」というNPに変わり、(9 b)では、dog, formがTへ移動して、「dog, form (n) + 時制」というVPに変わる。

ここで重要なのは、Nagano (2008a) が指摘しているように、CUAではベースや派生語という関係(以下、「派生関係」(directionality))がないことである。例えばhammerという語は、先に見たゼロ品詞転換では、hammer (n) + φ = hammer (v) という式で表すことができるように、ベースが名詞のhammer、派生語が動詞のhammerとすることができる。しかしCUAでは、hammer自体に名詞や動詞といった文法機能は存在せず、例えばJohn hit the nail with a hammer. という文で使われた時、初めて名詞としての機能を持つようになり、John hammered the nail. という文で初めて動詞としての機能が与えられるのである。そして派生関係がないというCUAの特徴が、同時に問題点ともなる。例えばGoogleという固有名詞と、googleという動詞を考えると、そもそもGoogleという検索エンジンがなければ(つまり、名詞としてのGoogleがなければ)、google (意味は「～を〔検索エンジンで〕調べる」)という動詞は生まれなかったであろう。つまり、品詞転換にはベース、派生語という派生関係が必要であり、これを想定しないCUAは、品詞転換の説明として妥当なものとは考えられない。

2.4 Re-listing

レキシコンの観点から見た時、品詞転換とは新語形成の一種であると言える。もちろん、品詞転換は既存の語に別の文法機能を付けることであるため、完全な新語形成とは異なるが、Re-listingでは、新語形成と同じプロセスを経て品詞転換が起こると説明している。Re-listingの代表的な先行研究は、Lieber (2004, 2005) である。具体的にhammerという語を使って説明すると、メンタルレキシコン（心的辞書）という語彙を保存する脳の部位からhammerという名詞が取り出され、それが形を変えず動詞として再びメンタルレキシコンに再入力されるのである。Re-listingの大きな特徴として、どのような語でも品詞転換の対象となることが挙げられる。これは、Clark and Clark (1979 : 787) が名詞由来の動詞の解釈がコンテキストによって変わることについて触れていることと関連していて、実際Lieber自身、この部分を引用している (2004 : 94)。Clark and Clarkの名詞由来動詞の6つの原則について、以下に示す。

- (10) 革新的（話し手が即興で作り出した）名詞由来動詞の慣習。革新的名詞由来動詞を誠実に使用する際、話し手は（次の）ことを示すつもりである。
 - a. ある状況を示す。
 - b. （その状況とは）話し手が以下のことを想定する十分な理由がある。
 - c. （その想定とは）聞き手が難なく、
 - d. 一つの解釈に絞られるように理解できるということである。
 - e. （その解釈は）話し手と聞き手に共通する知識を基に導き出される。
 - f. その状況では名詞由来動詞の元々の名詞がある役割を示し、その名詞由来動詞の残りの表面構造における項がその他の役割を示す。

Lieberは、この原則を名詞由来動詞だけでなく、全ての品詞転換をした動詞（例えば、形容詞から品詞転換した動詞等）に広げているが、本稿ではさらに広げ、動詞だけでなく全ての品詞転換にこの原則を当てはめる。この説明方法によって、2.2のゼロ品詞転換で見た問題点である、間投詞やフレーズ、句動詞やイディオムの品詞転換も解消することができる。つまり、これら4種類の語句もメンタルレキシコンから取り出され、新たな文法機能が付加されて再入力されたと考えることができるため、接（尾）辞にはない変化であっても、Re-listingでは説明することができる。

Re-listingの批判として、Don (2005) は英語以外の言語を考慮して、この説明方法の問題点を示しているが、本稿では英語の品詞転換のみを扱うため、この問題点に関しては触れないことにする。また、Nagano (2008b) は、LieberがRe-listingに派生関係を想定していないことを指摘している。確かにLieber (2005 : 421) は、Re-listingを“not derivational at all.”と述べている。しかし、2.3のGoogleの例で見た通り、派生関係は品詞転換に必須のものであり、ここではNaganoの指摘が正しいと考えられる。Re-listingが最良の説明だと考えられるが、本稿では、これにベースと派生語という派生関係を加えたものを品詞転換の説明とする。

2.5 D構造における派生語の操作

2.2から2.4を考慮すると、ゼロ品詞転換、CUA、Re-listingの3つを比べた時、最も良い品詞転換の説明方法は、Re-listingだと言えるだろう。ゼロ品詞転換は、Williamsの順序制限に違反するほか、通常の接（尾）辞にはないような種類の語句も品詞転換するため、不十分である。また、CUAは派生関係がないため、Googleのような固有名詞が動詞になることを考えると、問題のある説明方法であることが分かった。一方Re-listingは、ゼロ品詞転換では説明できなかった語句の品詞転換を説明できるが、2.4で述べた通り、Re-listingにも派生関係がないため、Re-listingにこの関

係性を加える必要があることを述べた。

品詞転換の説明方法以外の定義については、先行研究で似たようなものが提示されている。ここに(11a)から(11d)としてその内容を示すが、(11e)として上で述べたRe-listingに派生関係を加えたものを示すこととする。

(11) 先行研究で共通する品詞転換の定義 (a-d) 2.2～2.4の結論 (e)
(後に改良)

- a. 二つの語彙素が同一形であること。
- b. 二つの語彙素が同一の音であること。
- c. ベースと派生語の間に意味的な関連性があること。
- d. ベースと派生語が別の文法機能を持つこと。
- e. 品詞転換の説明がRe-listingに派生関係を合わせたものであること。

これら5つの定義をすべて満たしたものを品詞転換と呼ぶ。

(11a) は、形が品詞転換の前と後で変わらないということだが、2.1で述べた通り、Googleという固有名詞が動詞化する時、googleと小文字になることや、shelfとshelveの違いなど、問題がある。一方(11b)は、音が品詞転換の前と後で変わらないことを表しているが、これも2.1で述べたように、fragmentのアクセント位置が名詞ではfraで、動詞ではmentであることや、名詞houseが動詞化すると、「ハウス」から「ハウズ」と濁音化することを考えると、問題があることは否めない。

(11a, b) の問題を考える前に、ここで「逆成」(back-formation)について触れる。逆成とは、例えばeditorという名詞からeditという動詞ができるなど、一見接尾辞のように見えるもの(例で言えば-or)を削除して新たな文法機能を得ることである。Nagano (2008b : 182)は、逆成を次のように述べている。

(12) 逆成は、品詞転換の一種である。

逆成の一般的な説明は、接辞付与と反対のことが行われていると考えるものである。例えば、playという動詞に人を表す-erを付けてplayerとなるが、editorの-orを人を表す接尾辞であると解釈し、削除することで動詞editを作るのである。このように考えると、逆成は接辞付与と深く関係があるように思えるが、Nagano (ibid. : 183 (29)) は、逆成を接辞付与よりも品詞転換に近いものと位置付けている。その証拠として、Naganoは逆成によって与えられる意味範疇が接辞付与による意味範疇よりも広く、どちらかと言えば品詞転換の意味範疇に近いということを挙げている。Naganoによれば、逆成は元々の語とは異なる機能を持っているということを明確に示すため、表層構造において意図的に語の一部を削除したものである、とする。つまり、editが元々の名詞editorとは異なり、動詞としての機能を持っていることを明確に示すため、表層構造において-orを削除したもの、と考えるのである。つまり、深層構造においては、editor (v) という動詞が存在していることになり、これが表層構造の段階で、-orの削除が行われるのである。このようにしてできたeditとeditorを(12)を基に品詞転換だと考えると、深層構造でベースと派生語の綴りや音声が同じであれば、表層構造での操作は許される、と考えられる。つまり、editは深層構造ではeditor (v) であり、これはベースeditor (n) の形や音と同じであるから、表層構造でeditとなっても品詞転換と見なされるのである。

Nagano (ibid. : 216 (54)) は、品詞転換についても同じように説明している。先に見たfragmentやhouse、shelfについても、元々の名詞ではなく、動詞として使われるということを明確にするため、表層構造においてそれぞれアクセント位置の変化 (fraからment) や音の変化 (「ハウス」から「ハウズ」)、形の変化 (shelfからshelve) という操作が加えられたと説明できるのである。GoogleとgoogleについてNaganoは触れていないが、

これについても shelf の例のように、綴りの変化として捉えることができる。また、giveaway や state-of-the-art のような句動詞やイディオムの品詞転換についても、名詞や形容詞として使われることを示すため、表層構造でそれぞれベースとなる動詞、give away や、イディオム、state of the art に形の面で操作が加えられてできた、と解釈することができる。

逆成が実際に品詞転換の一種として考えられるかどうか、という問題については、本稿の目的ではないため、詳しくは追追しない。しかし、深層構造において形や音が同じであれば、表層構造において操作が許されるとする考えは、(11a, b) を解決するうえで重要であるため、品詞転換の定義として加えることとする。

2.6 2節まとめ

2.5 で述べたことを考慮すると、(11) で示した品詞転換の定義は以下のように改良することができる。

- (13) 2.5 の結論 (a, b)、先行研究で共通する品詞転換の定義 (c, d)、2.2 ~ 2.4 の結論 (e) (最終)
- a. 深層構造において二つの語彙素が同一形であること。
 - b. 深層構造において二つの語彙素が同一の音であること。
 - c. ベースと派生語の間に意味的な関連性があること。
 - d. ベースと派生語が別の文法機能を持つこと。
 - e. 品詞転換の説明が Re-listing に派生関係を合わせたものであること。

これら 5 つの定義をすべて満たしたものを品詞転換と呼ぶ。

(13a, b) が要求されるのは、深層構造においてのみである。表層構造では、ベースとは異なる文法機能を持っているということを明確に示すための操作が認められる。

(13c) は、同音異義語の区別のために必要となる。例えばfine weather等に使われる形容詞のfineと、罰金を表すfineが品詞転換ではないことは、意味のつながりが無いことから判断することができる。

2.1で*The Concise Oxford Dictionary of Linguistics*が自動詞と他動詞の変化も品詞転換として扱っていることに触れたが、本稿ではRe-listingというレキシコンの立場を取るため、自動詞と他動詞のような統語的变化は、品詞転換に含まれないものとする。また、ある語が自動詞と他動詞として別々にメンタルレキシコンに入力されることはないことから、自動詞と他動詞の変化を品詞転換とはしない。

Re-listingは、ゼロ品詞転換やCUAと異なり、間投詞 (oops)、フレーズ (Oh my God)、固有名詞 (Google)、句動詞 (giveaway)、イディオム (state of the art) 等、様々な種類の品詞転換を扱うことができる。これらの語はメンタルレキシコンから取り出され、別の機能として (例えば動詞や名詞、形容詞として) 再入力される。ゼロ品詞転換は、品詞転換を接辞付与と同じものと捉えるが、上のような語句の機能を変化させる接 (尾) 辞は存在しない。一方、CUAにはベース、派生語というものがないが、Googleのような固有名詞の品詞転換を説明する際に問題がある。よって、本稿ではRe-listingに派生関係を付けたものを採用し、以下で形容詞的受動分詞や現在分詞、修飾名詞について見ていくこととする。

3. 形容詞的受動分詞と形容詞的現在分詞

3.1 定義

英語では、受動分詞や現在分詞が、名詞を修飾する形容詞のようにして用いられることがある。例えば、動詞breakの受動分詞brokenは、a broken vaseのようにvaseを修飾する形容詞となり、動詞interestの現在分詞interestingは、an interesting bookのようにbookを修飾する形容詞となることができる。このような形容詞を、本稿ではそれぞれ「形容詞的受動分詞」と「形容詞的現在分詞」と呼ぶ。前者については、Levin and

Rappaport Hovav (1986) が品詞転換と見なしているが、後者が品詞転換の一種かどうかについて述べている先行研究は、筆者の知る限りない。Levin and Rappaport Hovavは形容詞的受動分詞を以下のように説明している。

(14) [[[break v] -ed v]_A]

ここでの-edとは受動分詞のことを表す。つまり、broken (adj) を動詞（受動分詞）brokenからの品詞転換だと捉えているのである。

形容詞的現在分詞を（14）と同じように示すと、以下のようになる。

(15) [[[interest v] -ing v]_A]

(14) と同じだと考えると、形容詞interestingは動詞（現在分詞）interestingからの品詞転換だということになるが、本稿での品詞転換の定義に当てはめて考えると、果たして（14）や（15）を品詞転換と捉えてよいのだろうか。

3.2 分析

形容詞的受動分詞と形容詞的現在分詞の分析に入る前に、再び本稿における品詞転換の定義についてここで示す。

- (13) 2.5の結論 (a、b)、先行研究で共通する品詞転換の定義 (c、d)、2.2～2.4の結論 (e) (最終)
- a. 深層構造において二つの語彙素が同一形であること。
 - b. 深層構造において二つの語彙素が同一の音であること。
 - c. ベースと派生語の間に意味的な関連性があること。
 - d. ベースと派生語が別の文法機能を持つこと。

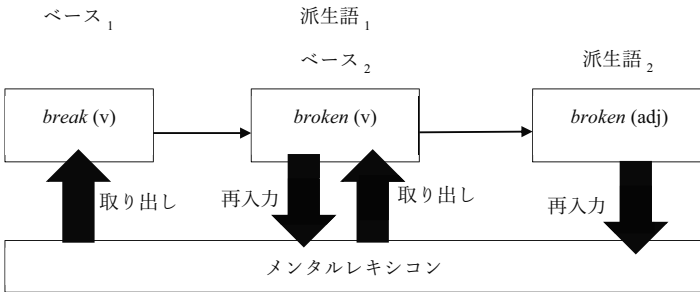
- e. 品詞転換の説明がRe-listingに派生関係を合わせたものであること。

これら5つの定義をすべて満たしたものを品詞転換と呼ぶ。

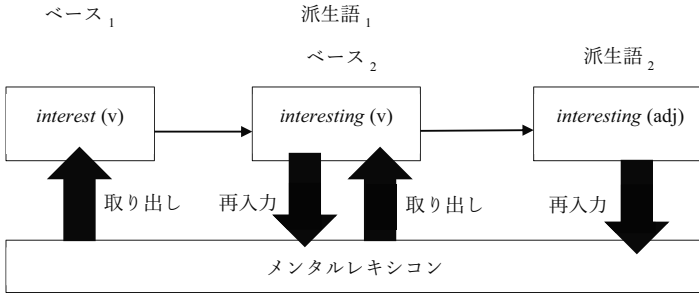
(13a, b) に関しては、形容詞的受動分詞も形容詞的現在分詞も、動詞（受動分詞や現在分詞）(broken、interesting) と形容詞 (broken、interesting) の形が同じであるため、定義を満たしているように思える。また、(13c) については、意味におけるつながりが受動分詞や現在分詞と形容詞の間にあると考えられる。

しかし、Re-listingを基にbrokenやinterestingを考察すると、(14) や (15) のような考え方には問題が生じる。2.4で述べたが、Re-listingは、品詞転換をメンタルレキシコンからの取り出しと再入力として捉えている。仮に (14) や (15) が正しいとすると、Re-listingによるこれらの解釈は以下のようなになるだろう。

(16) 形容詞的受動分詞（後改良）



(17) 形容詞的現在分詞 (後改良)

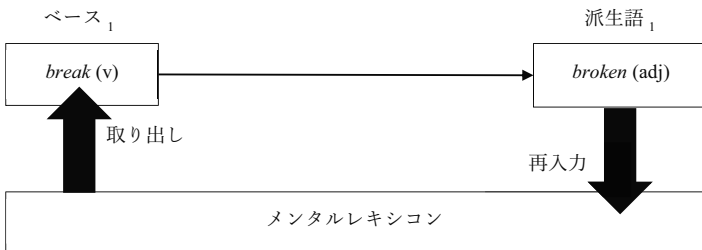


上の二つの図において、*broken (v)*や*interesting (v)*が(つまり受動分詞や現在分詞が)、*broken (adj)*や*interesting (adj)*のベースとなる語であるとするならば、品詞転換であると結論付けることができる。しかし、受動分詞や現在分詞は、**He broken the vase.* や **This book interesting me.* が非文であることから分かるように、単体では現れず、必ずbe動詞や他の動詞と共に用いられる。そのため、(14) や (15) の図のような*broken*と*interesting*が、それ自体、動詞としての機能を持っているとは考えられない。また、受動分詞や現在分詞は、動詞の辞書形とは別に、メンタルレキシコンに入力される程、意味が特別であるわけではない。受動分詞は“to receive [the act of the verb]”で表すことができ、現在分詞は“to continue [the act of the verb]”と画一的に表すことができるため、わざわざ動詞の辞書形とは別に、これら二つをメンタルレキシコンに入れる必要はない。

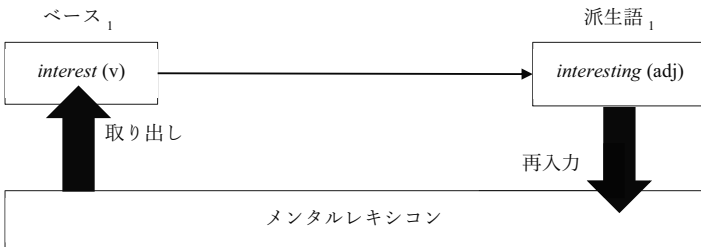
また、Don (2005 : 4) によれば、生産性の高い接辞が付いた語は、レキシコンに入力されることはないという。受動分詞を表す接辞(多くの場合-ed)や現在分詞を表す接辞(-ing)は、動詞であればほとんどのものに付けることができるため、生産性の高い接辞と呼ぶことができる。つまり、*broken (v)* や *interesting (v)* は、メンタルレキシコンに入力される

ことはなく、*broken* (adj) や *interesting* (adj) に品詞転換するベースになることはない。これらのベースとなるのは、動詞の辞書形である *break* や *interest* であり、形容詞になる際に形や音が変わっていることから、品詞転換と呼ぶことはできない。これを図にすると、(18) と (19) のようになる。

(18) 形容詞的受動分詞 (最終)



(19) 形容詞的現在分詞 (最終)



4. 修飾名詞

修飾名詞とは、形を変えずに次の名詞の修飾要素になっている名詞のことである。次の新聞記事から例を見てみよう (下線は筆者)。

- (20) Washington State's ferry system, which Fuchigami has identified as a potential model for Hawaii, gets 30 percent of its operating costs from subsidies and 70 percent from the fare box, ferry experts said.
(AP, (2016, December 30), "Hawaiian interisland ferry dreams face high costs, low public opinion," The Japan Times.
<<http://www.japantimes.co.jp/news/2016/12/30/world/hawaii-ferry-dreams-face-cost-public-opinion-hurdles-1-mike/>>)

ここでは、ferryという修飾名詞が、systemとexpertsという二種類の名詞を修飾している。

次に、(20) のような普通名詞ではなく、固有名詞が修飾名詞となる例を見てみよう（下線は筆者）。

- (21) Fujifilm Corp. said its influenza medicine Avigan is being given to an Ebola patient at a French hospital... With no approved Ebola medicines, doctors and international agencies have been forced to test experimental drugs.
(Bloomberg, (2014, September 27), "Fujifilm says French Ebola patient is taking its Avigan drug," The Japan Times.
<<http://www.japantimes.co.jp/news/2014/09/27/national/science-health/fujifilm-says-french-ebola-patient-is-taking-its-avigan-drug/#.WMEdkoVOI0Q>>)

ここではEbolaが修飾名詞となり、patientとmedicinesの二つの名詞を修飾している。(20) や (21) から分かるように、普通名詞や固有名詞に拘わらず修飾名詞になり、新聞記事に使われるぐらい、頻繁に使われているのである。

しかし、これを *ferry* (adj) や *Ebola* (adj) として、名詞である同語からの品詞転換と捉えることができるのだろうか。修飾名詞を品詞転換と捉えることができるかどうかを分析する前に、Huddleston and Pullum (2002) を取り上げ、先行研究ではこの問いに対してどのような見解が示されているかを見ることにする。

4.2 先行研究

Huddleston and Pullum (2002 : 537) によれば、学校で文法を教える際に使われる教科書では、(20) や (21) の *ferry* や *Ebola* のような修飾名詞を形容詞と見なしているものがあるとのことである。この場合、*ferry* や *Ebola* を名詞から形容詞への品詞転換と捉えるのであるが、Huddleston and Pullum は同じページで、「限定用法として機能している名詞を形容詞と分析すると、形容詞のカテゴリーに雑多なものが含まれ過ぎてしまい、形容詞と名詞のカテゴリーの間に不当な重複を要求してしまう」と主張し、この考え方に否定的である。

形容詞と修飾名詞の違いについて、Huddleston and Pullum は以下の二点を挙げている。一点目は、副詞の修飾先である。副詞は形容詞を修飾できるが、修飾名詞を修飾することはできない。例えば (21) の *a new Ebola patient* の例で、形容詞の *new* を副詞 *newly* に変えて **a newly Ebola patient* とすることはできない。同じように (20) の *ferry* も、*a new ferry system* は良いが、**a newly ferry system* とは言えない。修飾名詞は副詞によって修飾されないので、同じ副詞の *more* や *too*、*very* も同様に、修飾名詞を修飾しないはずである。(23) と (24)、(25) と (26) を比較すると、違いは明確である (下線は筆者)。

- (23) a. *[more ferry] system
 b. *[more ferry] experts
 c. *[very ferry] system

- d. * [very ferry] experts
 - e. * system which is [too ferry]
 - f. * experts who are [too ferry]
- (24)
- a. The expert says that a [more draconian] system is needed to prevent tax evasions.
 - b. Despite their youth, they are [more prominent] experts in the field than their elder colleagues.
 - c. The city has gathered worldwide fame for its [very magnificent] system of public transportation.
 - d. They were introduced as [very intelligent] experts in that party.
 - e. The car-parts company introduced a new manufacturing system [which some employees worry is too unreliable].
 - f. A crowd-funding has been set up for experts who are [too sick] to continue their researches.
- (25)
- a. * [more Ebola] patient
 - b. * [more Ebola] medicines
 - c. * [very Ebola] patient
 - d. * [very Ebola] medicines
 - e. * patient who is [too Ebola]
 - f. * medicines which are [too Ebola]
- (26)
- a. The doctor judged that she was a [more critical] patient, and treated her first.
 - b. The doctors believe that [more inexpensive] medicines for treating the disease will be made in the future.
 - c. She was a [very quiet] patient, and the roommates in the same

room were pleased with her silence.

- d. The company is famous for making [very effective] medicines for cancer.
- e. A new drug for treating the disease was given to a patient [who was too fragile] to withstand the conventional medicines.
- f. Doctors warn that taking medicines which are [too strong] often cause grave side effects.

上の括弧が示す通り、(23) や (25) におけるmore、too、veryは、system、experts、patient、casesではなく、ferryやEbolaを修飾しているものとする。これらが非文であるのに対し、(24) と (26) が示すように、more、too、veryは、draconian、vulnerable、intelligent、criticalのような形容詞を修飾することができるのである。

Huddleston and Pullumが指摘する形容詞と修飾名詞の二つ目の違いは、叙述用法にした時、補部に現れるかどうかである。つまり、形容詞または修飾名詞をA、これらが修飾する名詞をBとすると、ABをB is Aと書き換えたとき、Aの位置に形容詞や修飾名詞が現れるかどうか、という違いである。例えば (20) と (21) の下線部を、*The system is ferry、*The patient is Ebola、*The experts are ferry、*No medicines are Ebolaのようにすることはできない(定冠詞theは引用元にはなかったが、上の4つの文が語用論を抜きにしても非文であることを示すために付け加えた)。一方、(27) (28) のように、形容詞は補部になることができる。

- (27) a. The system is draconian.
- b. The experts are prominent.
- c. The system is magnificent.
- d. The experts are intelligent.
- e. The system is unreliable.

- f. The experts are sick.
- (28) a. The patient was critical.
b. The medicines are inexpensive.
c. The patient was quiet.
d. The medicines are effective.
e. The patient was fragile
f. The medicines are strong.

しかし、一方でHuddleston and Pullum (2002 : 538) は、修飾名詞が補部にならないことの例外として、素材を表す名詞を挙げている。例えばa cotton sheetのcottonは、The sheet is cotton. が適格であることから、形容詞のように思われるが、a pure (*purely) cotton sheetのように、形容詞がcottonを修飾するため、修飾名詞である。

例外はあるにしろ、Huddleston and Pullumは、修飾名詞と形容詞の違いを上での二点で説明した。Huddleston and Pullum (2002 : 1643) によれば、「全ての名詞（代名詞を除いて）は修飾名詞になり得る」と述べているように、代名詞以外のすべての名詞が修飾名詞になり得るので、修飾名詞は形容詞ではなく、名詞のカテゴリーに属しているという。すなわち、Huddleston and Pullumは、修飾名詞を名詞から形容詞への品詞転換とは捉えていないのである。

4.3 分析

本稿の定義を基に修飾名詞が品詞転換であるかどうかを検討する前に、もう一度本稿における品詞転換の定義を再掲する。

- (13) 2.5の結論 (a、b)、先行研究で共通する品詞転換の定義 (c、d)、
2.2 ~ 2.4の結論 (e) (最終)

- a. 深層構造において二つの語彙素が同一形であること。
- b. 深層構造において二つの語彙素が同一の音であること。
- c. ベースと派生語の間に意味的な関連性があること。
- d. ベースと派生語が別の文法機能を持つこと。
- e. 品詞転換の説明がRe-listingに派生関係を合わせたものであること。

これら5つの定義をすべて満たしたものを品詞転換と呼ぶ。

(13a)と(13b)について、修飾名詞はこれらを満たしている。(20)や(21)のferry、Ebolaは名詞であっても、patientやmedicinesを修飾する修飾名詞であっても、同じ形と音である。さらに、名詞の時の意味と修飾名詞の時の意味も、大きく関わりがあり、(13c)も当てはまる。(13e)の派生関係についても、Ebolaという病気がなければ修飾名詞として用いられることがないため、名詞から修飾名詞という派生関係が成り立つはずである。

しかし、ここでは(13d)が問題となる。4.2で引用した通り、Huddleston and Pullumは代名詞を除く全ての名詞が修飾名詞になると述べている。つまり、代名詞以外の名詞はそれ自体に修飾名詞としての機能を持っているのであり、修飾名詞は名詞としての機能の一つに過ぎないのである。品詞転換は機能の変化を条件としているが、ここでは名詞という機能に変わりはない。そのため、Huddleston and Pullumが主張するように、修飾名詞を品詞転換と捉えることはできないのである。

5. 結論

本稿では、以下の2つのことを主張した。一つは品詞転換の定義についてである。先行研究では、品詞転換の定義に違いが見られるだけでなく、ゼロ品詞転換やCUA、Re-listingという3つの説明方法が存在するなど、対立する部分も見られた。3つの説明方法について詳しく分析する

と、Re-listingが最も妥当な説明であったが、ベースと派生語という派生関係を想定していなかったため、Re-listingにこの派生関係を加えたものを本稿で採用した。また、その他の定義については、(13a) 深層構造において二つの語彙素が同一の形であること、(13b) 深層構造において二つの語彙素が同一の音であること、(13c) ベースと派生語の間に意味的な関連性があること、(13d) ベースと派生語が別の文法機能を持つこと、という4つの定義を加えた。ある語が品詞転換であると認められるには、(13a-e)の5つを満たさなければならない。

二つ目の主張は形容詞的受動分詞、形容詞的現在分詞、修飾名詞が品詞転換であるかということである。(13)の定義に基づけば、これら3つは、いずれも品詞転換と見なすことはできないと結論付けられる。

参考文献

- Aitchison, J. (1987) *Words in the Mind: An Introduction to the Mental Lexicon*, Basil Blackwell Ltd, Oxford.
- Bauer, L., R. Lieber, I. Plag (2013) *The Oxford Reference Guide to English Morphology*, Oxford University Press, Oxford.
- Borer, H. (2003) "Exo-Skeletal vs. Endo-Skeletal Explanations: Syntactic Projections and the Lexicon," *The Nature of Explanation in Linguistic Theory*, ed. By John Moore and Maria Polinsky, 31-67, CSLI Publications, Stanford.
- Clark, E. V., H. H. Clark (1979) "When Nouns Surface as Verbs," *Language* 55, 767-811.
- Don, J. (2005) "On Conversion, Re-listing and Zero-Derivation" *SKASE Journal for Theoretical Linguistics* 2, 2-16.
- Haspelmath, M., A. D. Sims (2010) *Understanding Morphology*, 2nd edn, Hodder Education, London.
- Huddleston, R., G. K. Pullum (2002) *The Cambridge Grammar of the English Language*, Cambridge University Press, Cambridge.

- Levin, B., M. Rappaport (1986) "The Formation of Adjectival Passives," *Linguistic Inquiry* 17, 621-661.
- Lieber, R. (2004) *Morphology and Lexical Semantics*. Cambridge University Press, Cambridge.
- Lieber, R. (2005) "English Word-Formation Processes: Observations, Issues, and Thoughts on Future Research," *Handbook of Word-Formation*, ed. by Pavol Štekauer and Rochelle Lieber, 375-427, Springer, Dordrecht.
- Marchand, H. (1969) *The Categories and Types of Present-Day English Word-Formation: A Synchronic-Diachronic Approach*, 2nd edn., C. H. Beck, Munich.
- Matthews, P. H. (2014) *The Concise Oxford Dictionary of Linguistics*, 3rd edn, Oxford University Press, Oxford.
- Nagano, A. (2008a) "Categorical Change of Conversion and the Process of Relisting," *English Linguistic* 25, 369-401.
- Nagano, A. (2008b) *Conversion and Back-Formation in English: Toward a Theory of Morpheme-Based Morphology*, Kaitakusha, Tokyo.
- Plag, I. (1999) *Morphological Productivity: Structural Constraints on English Derivation*, Mouton de Gruyter, Berlin.
- Strauss, S. L. (1982) "'Relatedness Paradoxes' and Related Paradoxes," *Linguistic Inquiry* 13, 694-700.
- Wehmeier, S. et al. (2005) *Oxford Advanced Learner's Dictionary*, 7th edn, Oxford University Press, Oxford.
- Williams, Edwin (1981) "On the Notions 'Lexically Related' and 'Head of a Word,'" *Linguistic Inquiry* 12, 245-274.

The Definitions of English Conversion and Their Applications

KIMURA, Takuto

In the previous studies of English morphology, the definitions of conversion seem to be vague and conflicting. They are based on a narrow range of words, mostly denominal verbs, and include as many as three approaches (zero-derivation, category underspecification, re-listing). By taking into account additional types of conversion, such as interjections (e.g. *oops*), phrases (e.g. *oh my God*), phrasal verbs (e.g. *giveaway*) and idioms (e.g. *state of the art*), which have rarely been mentioned in the previous studies, this paper seeks to clarify the definitions of conversion: (a) formal identity in the deep structure, (b) phonological identity in the deep structure, (c) semantic relations between converted words and their bases, (d) different grammatical functions between converted words and their bases, and (e) re-listing plus directionality from bases to their converted words.

Based on these definitions, this paper also argues that adjectival passive participles (e.g. *broken in a broken vase*), adjectival progressives (e.g. *interesting in an interesting book*) and attributive modifiers (e.g. *Ebola in an Ebola patient*) should not be considered conversions. As for adjectival passive participles and adjectival progressives, their bases are not passive participles and progressives of the verbs (e.g. *broken* (v), *interesting* (v)), but their original forms (e.g. *break*, *interest*). Since the bases in original forms and their derivatives are in violation of (a) formal identity and (b) phonological identity, they should not be categorized into conversion. According to Huddleston and Pullum (2002: 1643), since all nouns other than pronouns can be used as attributive modifiers, *Ebola* in *an Ebola patient* can be considered as one of innate trait of the noun *Ebola*. Attributive modifiers do not meet (d) different grammatical functions. Therefore, attributive modifiers should not be categorized into conversion.

(英語英米文学専攻 博士前期課程 2 年)